別添資料①

ー認め支え合う学級の実現に向けてー

支持的風土の醸成された学級づくりのためのハンドブック

「学校実践編」

令和５年３月

広島市教育委員会

～はじめに～

令和４年３月に、支持的風土の醸成された学級づくりのためのハンドブックを作成し、「学級経営をする上で参考になる」など、たくさんの肯定的な声を聞きました。

そして、令和４年度には、多くの学校が、このハンドブックを参考に様々な実践を行ったと聞いています。しかし、同時に、「より多くの実践事例を紹介してほしい」という声もいただきました。こうしたことから、令和４年度の指定校における実践事例の中から、参考にしていただきたい取組を紹介させていただきたいと思います。

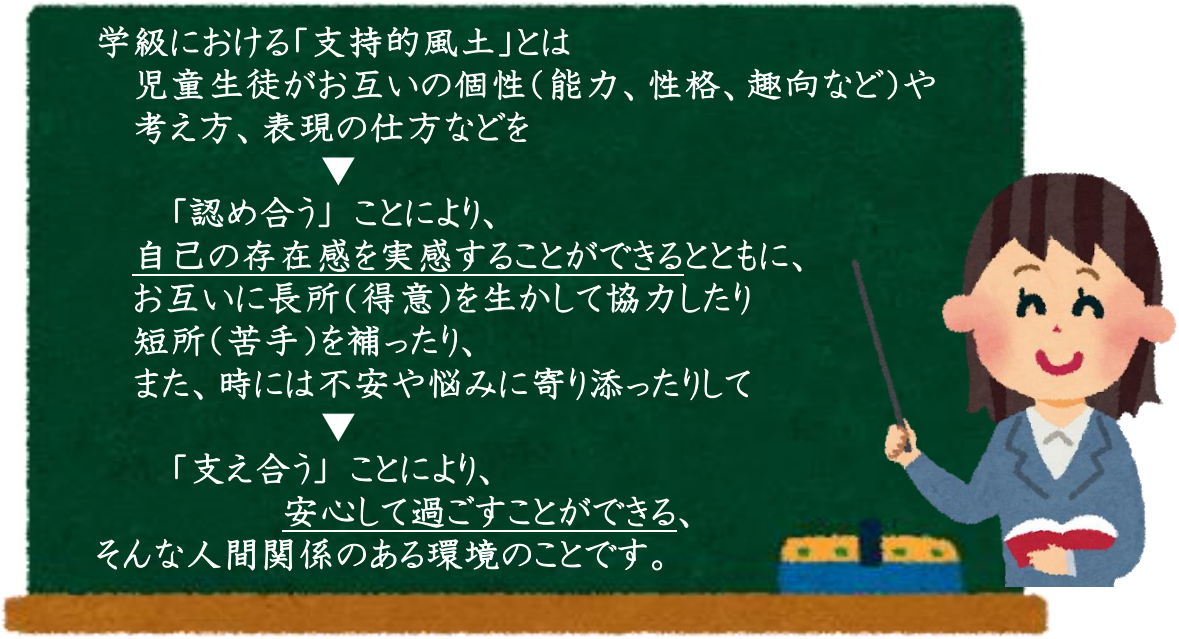
各学校におかれましては、この別冊による学校実践を参考にしつつ、さらなる取組の推進に役立てていただき、一人ひとりの児童生徒が、自らの存在感を実感することができ、安心して過ごすことができる、支持的風土の醸成された学級づくりの実践に取り組んでいただきたいと思います。

本別冊では、
「学級経営の計画とその実践の評価・改善」のうち、
①年間計画　②児童生徒理解
「学級活動」のうち、
①授業づくり　②自己表現力の向上　③話し合い活動
における、実践例を掲載しています。

特に、「学級活動」③話し合い活動では、学級づくりにとどまらず、その取組が学年、学校での取組となり、まさに支持的風土の醸成された「学年」づくり、支持的風土の醸成された「学校」づくりへと、発展しています。

また、「いじめ事案から考える『支持的風土の醸成された学級づくり』」として、校内研修に活用できる資料も掲載しています。

計画、実践に当たって、随時活用してください。



学級経営の計画と その実践の評価・改善

支持的風土の醸成された学級づくりのためには、教師による児童生徒理解とそれにともなった教師と児童生徒との関係づくりがとても重要です。
そのための実践を紹介します。

戸坂城山小学校

① 年間計画

１年間の学級経営に関して、年間計画を立てる際、教師と児童生徒、児童生徒同士の関係性に注目し、その時期にあった取組を推進することが大切です。
特に、教師にとって、年間を通して学級の児童生徒を育成するといった責任感とともに、次年度は次の教師にバトンタッチすることを念頭に計画を立てることが重要です。

年間を通した教師と児童生徒、児童生徒同士の関係性のイメージを持つ

４月（居場所づくり期：出会いの季節）

児童生徒は、夢や希望を抱き、新しい教室で自分の居場所（ホッとできる場）を求めます。この時期は、児童生徒は教師の方を向き、「こっち向いて」「自分をわかって」とアピールします。
教師は、前の学年の引継ぎ資料や教師からの引継ぎを参考に、児童生徒自身の言葉、表情、関係性等から児童生徒を知ることが重要です。教師は、児童生徒一人一人の１年後の姿、卒業した姿、成人した姿をイメージし、学級集団の成長したゴール像を描きます。

５～７月（友だちづくり期：活発に動く季節）

一定の安心感を抱いた児童生徒は、自己実現に向けて友だちを求めて動き始めます。友だちとの接触が増えると、相手の思いとの相違に気づき、トラブルが発生していきます。

１０月（生活づくり期：自分を見つめる季節）

学級集団での学習や生活における関わりが活発になります。授業、行事を通じて集団の関わりが密になります。

１月（出会い直し期：新しい自分発見の季節）

生活づくり期での学習・経験を乗り切って、新しい自分と集団に気付き、互いに成長を実感します。

② 児童生徒理解の工夫

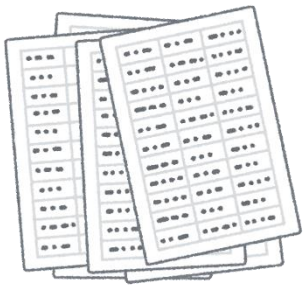
戸坂城山小学校

支持的風土の醸成された学級づくりを推進する上で、「児童生徒理解」は非常に重要です。特に、表面上、問題が見られず、学校生活で目立つこともないような児童生徒に対しては、理解や支援のための積極的なアプローチを行う機会が少なくなりがちです。

そこで、そういった児童生徒を抽出し、その児童生徒に対して意識的にアプローチする場面を作ります。

児童生徒理解のひと工夫

ステップ①：学級の名簿を見ないで２分間で、担当学級の児童生徒名を書き出す。



ステップ②：書き出した児童生徒名から、「関わりが薄いな」「あまり声をかけてないな」と感じる児童生徒を数名ピックアップする。

ステップ③：その児童生徒に対して、今後の支援策を考える。

例
- 積極的に声をかける。
- 日頃、「姿勢がいいね」「提出物頑張ったね」と肯定的な評価をする対象の児童生徒を、意識的にその児童生徒にする。
- その児童生徒を中心とした人間関係を観察する。
- 連絡ノートなど毎日児童生徒が見るものに、励ましや頑張っていることのメッセージを書く。

ステップ④：前期末・後期末などの節目には、児童生徒一人一人の成長や良さ、課題を名簿に書き加えていく。

Point

年間を通して複数回行うことで効果が増します。その場合は、「出席番号順に思い出す」「座席から思い出す」「何もきまり等に従わずに思い出す」など、思い出す方法を意識的に変えることで、いろいろな視点での抽出ができます。

また、教師が個人で行うのではなく、校内研修として行うことで他の教師の視点や考えを参考にすることができて、より効果的です。

学級活動

戸坂小学校

① 授業づくり

教科の指導と生徒指導を一体化させた授業づくりは、自己存在感の感受、共感的な人間関係の育成、自己決定の場の提供、安心・安全な風土の醸成を意識した実践であることが重要です。

こうした実践が、支持的風土の醸成された学級づくりを促進します。

「授業のめあて」の工夫

提示する授業のめあてを、生徒指導上の４つの視点を意識しためあてにする。

例

めあて　自分の考えと同じか違っているかを視点に、グループで話し合い、自分が考える〇〇〇が開国した理由をプリントにまとめる。

主に
(2) 共感的な人間関係
(3) 自己決定

めあて　たしざんのけいさんほうほうでくふうしたことをグループの人にせつめいすることができる。

主に
(1) 自己存在感
(3) 自己決定

めあて　主人公の行動についてグループで話し合い、グループの意見も参考にしながら自分の考えをまとめることができる。

主に
(2) 共感的な人間関係
(4) 安心・安全

教師が、授業の中で生徒指導上の４つの視点を持って授業を展開することにより、児童生徒は、目標をもって授業に取り組み、自己存在感を感受できたり、共感的な人間関係を育成できたりします。

さらに、教科としての目標を教師がしっかりと持つことで、教科の指導と生徒指導を一体化させた授業づくりを行うことができます。

Point

教科の指導と生徒指導の一体化（生徒指導提要 P.46,47 より）

（１） 自己存在感の感受を促進する授業づくり
　児童生徒の多様な学習の状況や興味・関心に柔軟に応じることにより、「どの児童生徒もわかる授業」「どの児童生徒にとっても面白い授業」になるよう創意工夫する。

（２） 共感的な人間関係を育成する授業
　失敗を恐れない、間違いやできないことが笑われない、むしろ、なぜそう思ったのかという児童生徒の考えについて児童生徒同士がお互いに関心を抱き合うようにする。

（３） 自己決定の場を提供する授業づくり
　児童生徒に意見発表の場を提供するなど、児童生徒が協力して学習する取組を積極的に進め、児童生徒の学びを促進するファシリテーターとしての役割を果たす。

（４） 安心・安全な「居場所づくり」に配慮した授業
　一人一人の児童生徒が安全・安心に学べるように学級・ホームルーム集団が児童生徒の「（心の）居場所」になることが望まれる。

② 自己表現力の向上

温品中学校

自分のことや自分の意見を相手に理解してもらえるように、相手や場面に応じて伝え方を工夫しながら表現力を養います。
互いの良さを認め合うことにより、自己効力感を高め、支持的風土の醸成を促します。

【例】体育祭を振り返ろう

（１時間目）

振り返り	ビデオや写真で体育祭の雰囲気や思い出を共有	５分
	個人で振り返りのワークシートに記入 ・自分の頑張り、成長　・学級、学年の成長、団結 ・仲間のいいところ見つけ　・今後の生活に活かすこと	２０分
発表の説明	方　　法：学級内全員が一人１分間、振り返りを発表する ポイント：丸暗記や読み上げるのではなく、伝えたいポイントを押さえて、その場で話を組み立てる モデリング：教師が、話し方や態度を中心に、聞く際の評価のポイントを示しながらよい発表の例を実演する。 悪いモデリング（丸暗記や読み上げのような例）を示すのも効果的であるが、それを行う場合は、必ず教師自身が行うこと。	５分
発表の練習	個人で発表の練習（１分間×数セット）	５分
	ペアでの発表の練習（数セットずつ、互いに評価やアドバイスをする）	１０分
次時の見通し	日程と発表順を説明	５分

（２時間目）

確認	発表の方法や発表のポイントを確認（前時の振り返り）	２分
準備	相互評価のためのシートを配付し、記入方法を説明	３分
発表	事前に説明した順で発表（評価を記入しながら聴く）	４０分
評価	学級のベスト３の発表を、自分の評価で選ぶ 自分の発表についても評価を記入する	５分

◇　活動後、相互評価やベスト３については、集約して掲示することで、さらに支持的風土の醸成が促されます。

Point

行事の事前準備として、児童生徒に自身の役割を意識させつつ、他者とどのように関わるのが望ましい姿か具体的なイメージを持てるようにし、事後には、自分なりに工夫したことや努力したことを振り返らせた上で、学級・学年内、場合によっては学校内で発表する機会を設定することが大切です。
また、体育祭等の前に振り返りのポイントを示すことで、自分だけでなく、他者にも目を向け、より広い視野で考えることを意識させることができます。

③ 話し合い活動

可部南小学校

「支持的風土の醸成された学級づくり」のためのハンドブックで紹介した、「『議題ボックス』で学級の課題を提案」の具体的な取組です。

児童生徒に役割を持たせ、主体的に学級や学校の生活をより良くしようと、話し合い、合意形成することで、「支持的風土の醸成された学級づくり」の大切さに気付かせることができます。また、一部の学級だけの取組ではなく、学年や学校の全ての学級で取り組むことで支持的風土の醸成された「学年」づくり、支持的風土の醸成された「学校」づくりへと発展します。

学級会の進め方

① 提案カードの確認

計画委員は教室に設置されたポストを定期的に確認し、提案カードに書かれていた内容を教師と整理する。

その上で、係にお願いするのか、学級会で話し合うのかなどを決め、朝学活や終学活で報告する。

【4～6年用】

年　組　提案カード

提案カード	月　日	名前

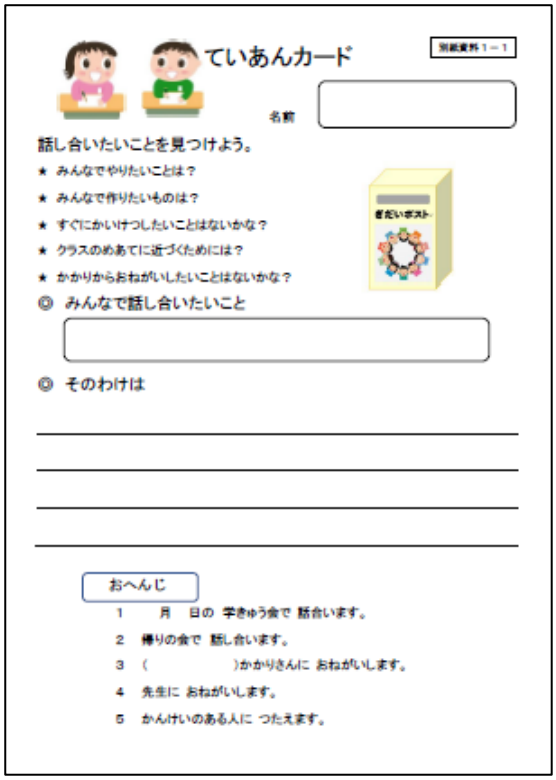
提案します！　（当てはまるものに○をつけよう）
（　）個人から　（　）係から

提案したいこと（当てはまるものに○をつけて書こう）
（　）みんなでやってみたい　（　）みんなで作ってみたい　（　）みんなで解決したい

〈提案理由〉

この提案は，
1　学級会で話し合います。　2　係にお願いします。
3　朝の会・帰りの会で話し合います。　4　先生にお願いします。
5　その他（　　）

【1～3年用】



○　年度初めに、提案カードを説明する。

例　・　提案カードはいつ書いても、いつ提出しても良いこと。
　　・　提案の目的、理由をはっきりさせること。　など

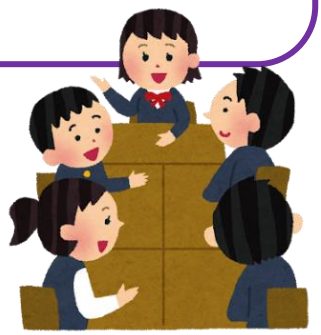
○　学級に「計画委員」を配置する。年間を通して、全員に経験させる。

② 学級会の準備

計画委員は、提案カードに書かれていた内容が学級会で話し合うべき議題のときに、学級会の流れ等を教師と確認する。

Point

○　学級会の「目的」「方法」をはっきりさせる。
○　学級会での話し合いの流れを考える。
○　学級会は、事前の準備をしっかりして、学級会当日は児童の主体性に任せて、教師の支援は必要最低限にする。



いじめ事案から考える
「支持的風土の醸成された学級づくり」に向けた校内研修

いじめに対する対応として求められるのは、未然防止に向けた取組です。

全ての児童生徒を対象とする発達支持的生徒指導及び課題予防的生徒指導への転換

いじめを生まない環境づくりと児童生徒がいじめをしない態度や能力を身に付ける

広島市においては、いじめを未然に防止するためには

「支持的風土の醸成された学級づくり」

の取組をより一層推進することが必要であると考えています。

そこで、広島市で起こった過去のいじめの事例を活用した事例検討のための研修資料を作成しました。

事例１（P.8）
被害児童が同じ学年の多くの児童からいじめを受けていた事例

事例２（P.9）
双方の行為がある事例

事例３（P.10）
いじめの加害行為から不安が解消できなかった事例

研修の視点は、このような事例が起こらないようにするためには、どのような「支持的風土の醸成された学級づくり」の取組が必要かを考えます。

以下の５つの視点から、「支持的風土の醸成された学級づくり」のためのハンドブックを参考に、具体的な方策を考えましょう。

【取組の視点】（生徒指導提要　4.3.1 いじめ防止につながる発達支持的生徒指導　4.3.2 いじめの未然防止教育　より）

① 「多様性に配慮し、均質化のみに走らない」学校づくりの取組
② 対等で自由な人間関係が築かれるようにする取組
③ 「どうせ自分なんて」と思わない自己信頼感を育む取組
④ 「困った、助けて」と言えるようにする取組
⑤ 未然防止教育の推進の取組
- いじめる心理…いじめの問題を自分のこととして捉え、考え、議論する。
- いじめの構造…「傍観者」を「仲裁者」や「相談者」にする。
- 法律的な視点…市民社会のルールを守る姿勢を身に付ける

自己への信頼とは、主体的に取り組む共同の活動を通して他者から認められ、他者の役に立っていると実感することによって育まれます。

※ 研修時には P.11 のワークシートに具体的な取組を書き込み、共有しましょう。

事例１「被害児童が同じ学年の多くの児童から いじめを受けていた事例」

【取組の視点】
②　④　⑤
を中心に

１　関係児童

【被害】小学３年女子　Ａ

【加害】Ａと同じ学年の複数の児童

２　いじめの概要

Ａは、同じ学年の多くの児童から「髪の毛先を切られる」、鬼ごっこをしている時などに、遊び半分で「叩かれる」「蹴られる」「ぶつかられる」「砂などを投げられる」、また、日常的に「悪口を言われる」等をされていた。

Ａは保護者と一緒に、教師にいじめの被害を訴え、教師は、アンケート調査や聴き取り調査を行ったが、情報が十分に得られず、全容を確認するまでには至らなかった。

その後、Ａは不登校となり、また、Ａと同じ学級の別の２名の児童もいじめを訴え、教育委員会による調査に至った。

調査の中で、複数人の児童が協力し、髪を切る際には、見張り役を立てるなど、教師が気付きにくくしていたことがわかった。また、他の児童に口止めされたことや自分が標的にされたり仲間はずれにされたりすることを理由に、教師に報告したり相談したりしていなかった。

さらには、加害児童の複数人が、Ａが加害行為をしているとの嘘を周りに話し、事実を知らない児童は、それを確認することなく、Ａをいじめの加害児童であると思い込んでいた。そのため、調査の聞き取りでも、Ａが加害行為をしていると信じている児童も多く、事案の全容を把握することが難しかった。

事例２「双方の行為がある事例」

１　関係児童

【被害】小学５年男子　Ａ

【加害】小学５年男子　Ｂ、Ｃ、Ｄ

【取組の視点】
②　⑤
を中心に

２　いじめの概要

Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄは、いつも仲良く、教室を走り回って遊ぶような仲であった。

いつものように、ＡはＢの肩を組み一緒に遊んでいたところ、Ｂは、いつも肩を組んでくるＡを快く思っておらず、「離せ」と、強く押した。しかし、いつものことと思いＡは肩を組もうとすることをやめなかった。

いつもと違うＢの雰囲気を感じたＣ、ＤはＡに、「やめろよ。あやまれよ」と言ったが、Ａは気にせずその場から離れようとした。

その態度に腹を立てたＢ、Ｃ、Ｄは、Ａを追いかけ、逃げ回るＡを捕まえると、暴れるＡを床や黒板に押さえつけた。ちょうどチャイムが鳴ったので、その場は収まり次の授業となった。

その後も、Ｂ、Ｃ、ＤはＡの行動に腹を立てており、Ａと話すことはなかった。ＡはＢ、Ｃ、Ｄが何に怒っているのかが分からず、３人から床等に押さえつけられた恐怖から、翌日以降学校に来ることができなくなった。

Ａから事情を聞いた教師は、Ｂ、Ｃ、Ｄに話をするが、３人はＡのせいだと話し、加害行為は認めるが、Ａが謝るのが先だとして解決できなかった。

事例３「いじめの加害行為から不安が解消できなかった事例」

【取組の視点】
①　③　⑤
を中心に

１　関係生徒

【被害】中学１年男子　Ａ

【加害】Ａとは違う小学校出身の同級生

Ａと同じ小学校出身の同級生

２　いじめの概要

Ａは、入学後から、学級内で本人が嫌がるあだ名で呼ばれたり、疎外されたり揶揄されたりするような発言や行動をされたりしていた。

同じ小学校から進学してきた同級生は、小さいころからＡを理解していたこともあり、Ａに対してそのような発言や行動をすることはなく、Ａに対して疎外したり揶揄したりするのは、違う小学校から進学して来た一部の同級生であった。

教師は、学級内でそのような雰囲気を感じており、その都度、学級全体に話したり、個別に指導したりしていたが、Ａの不満が解消することはなかった。

こうした状況の中Ａは、これまで疎外したり揶揄したりすることはなかったＡと同じ小学校出身の同級生から聞こえてくる日常会話の内容も、自分を疎外した内容ではないか、揶揄している内容なのではないかと強く感じるようになった。そして、自分のことをほとんどの同級生が疎外したり揶揄したりしているのではないかと強く感じるようになり、学校に来ることができなくなってしまった。

その後も学校は、Ａからの訴えを一つ一つ聞き、訴えに係る生徒に指導、保護者への連絡等、丁寧な対応を続けたが、Ａの不満・不安を解消することができずＡは転校した。

ワークシート（事例　１・２・３）←どの事例についてなのか○をする。

以下の視点で、事例が起こらない学級を作るためには、どのような取組をすればいいのか、できるだけ現実的に、具体的に書きましょう。

①「多様性に配慮し、均質化のみに走らない」学校づくりの取組
② 対等で自由な人間関係が築かれるようにする取組
③「どうせ自分なんて」と思わない自己信頼感を育む取組
④「困った、助けて」と言えるようにする取組
⑤ 未然防止教育の推進の取組